相生橋煙雨

野口冨士男

文藝春秋

著者略歴

明治四十四年東京生れ。慶応義塾大学文学部中退。「風の系譜」で文壇に登場。小説に「白鷺」「いのちある日に」「暗い夜の私」「かくてありけり」（読売文学賞）「流星抄」「散るを別れと」「なぎの葉考」（川端康成賞）「風のない日々」「いま道のべに」等、評論・エッセイに「海軍日記」「徳田秋声伝」（毎日芸術賞）「わが荷風」（読売文学賞）「私のなかの東京」「徳田秋声の文学」「作家の椅子」「断崖のはての空」等がある。昭和五十七年、作家としての業績により芸術院賞を受賞した。

相生橋煙雨

昭和五十七年六月五日　第一刷

定価　千七百円

著者　野口冨士男（のぐちふじお）

発行者　杉村友一

発行所　株式会社　文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三
電話　（〇三）二六五―一二一一

印刷所　精興社

製本所　大口製本

万一、落丁乱丁の場合はお取替致します

©FUJIO NOGUCHI 1982　Printed in Japan

目次

相生橋煙雨　5
手暗がり　89
火の煙　115
川のある平野　133
熱海糸川柳橋　165
あとがき　205

装画　酒井不二雄
AD　坂田　政則

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

相生橋煙雨

〈野口冨士男作品集〉

相生橋煙雨

1

暑い盛りに群馬県の館林へ行ってその絵を見せてもらってから、江東区の越中島と中央区の月島とを結んでいる相生橋へ行ってみるまでには、一カ月半ちかく——正確には四十二日間が過ぎていた。

私の家から相生橋へ行くには、地下鉄東西線に乗って門前仲町で下車するのが最も便利である。しかも地下鉄へ乗ってしまえば十六、七分しかかからないのに、たったそれだけのことを四十日以上も果せなかったのは、わずかばかりの仕事にいつまで手間取っていた私の意気地なさ、要領の悪さが原因で、そんな状態は今にはじまったことではない。むしろ、常態とすら言うべきであった。

「書き直しが多くて結果的に遅筆だから、いつでも忙しいんです。書き直しさえなかったら、ほんとは閑なんですがね」

インタビューを受けた新聞社の人に、私は答えたことがある。

そんな次第で、兎にも角にもやっとその機会をとらえて行動に移せたのは九月十二日のことであったが、あいにくの天候のために、私は目的地へ着いても降りつづいていてはメモを取るのに具合が悪いなと思いながらも、霧雨の中を傘をさして出かけた。館林まで行って見てきた絵に対していだいていた、ほんの小さな疑問ともいえないほどの疑問の一つをときほぐしたかったからにほかならない。わざわざそんな日をえらんだわけでは決してなかったが、俄かに思い立って出かけて行ったのは、四十日以上ものびのびになっていたために、それ以上こらえきれなくなっていたというのが、いつわらぬところであった。一日のばしにしていては、さらに一週間や十日はすぐに過ぎていってしまうという気持もあった。

あれは、どこへ行ったついでであったろうか。

今では季節すら思い出せなくなってしまっているが、一度だけ私が相生橋の上に立ったことがあるのは、敗戦直後の二十二年か、その翌年あたりだったはずだから、その時分からではすでに三十年以上もの歳月が経過している。橋を渡ったというおぼえはなくて、立ったという記憶だけがのこっているので、そのときにも橋を見に行ったに違いないと思わ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

れるのに、眼底へおさめたはずの橋の姿は、完全にと言わねばならぬほどきれいに消え去ってしまっている。海軍では不馴化性全身衰弱症とよばれていたが、栄養失調症のためになかば以上死にかけていたひどい健康状態で復員してきて、頭脳の機能が極度に低下していたころだったせいに相違ない。

「見に行っていながら、なんにも見ずに帰って来ちまったんだな、結局」

私は敗戦直後のおのれの体調——特に思考力も記憶力も衰退しきっていた頭脳が、組織を破壊されていたと言う以外にいかなる表現の仕方もないような状態におかれていたということに、あらためて気づかされずにはいられなかった。

あの絵の最末端部にえがかれていたあの橋は、相生橋ではないのか。

相生橋ではないとすれば、私はその画家が隅田川の河畔に立った最終地点を見うしなうことになる。が、かりに相生橋であったことを確かめ得たとしても、その画家に対してはもとより、その絵そのものを理解できることにはならない。別の言葉で言えばなんともむなしい行為に過ぎないことだとわかっていながら、その一つのことを確かめずにはいられぬものが、私にはあった。

なにが、その画家に私が魅せられた原因であったか。

理由の一つ二つはたやすく数えられるものの、それよりもっと奥にあるはずのほんとうの原因といったものは、わかっているようでありながら、やはりわかってはいない。

傘を持った上に、私がレインコートを着て帽子までかぶって行ったのは、肌寒さの感じられる十月中旬の気温だということであったし、雨がやまなければ帽子を雨よけにして傘を腋の下へかかえてしまえば、なんとかメモも取れるだろうと考えたからであった。

「なるようになれ」

なかば捨て鉢のふてくされた気持であったが、門前仲町で下車したときには家を出たころよりなにがしか勢いを増していたほどの小雨が、清澄通りを南へ進みはじめて、洲崎川にかけられた黒船橋を越えてからものの二分間とも歩いたとは思われぬ地点へさしかかったころには、もはや傘をささなくてもいい程度の霧雨に変っていた。そして、運転系統の相違から二つあるうちの手前にあたる越中島バス停留所のあたりへさしかかると、じっと眼をこらさなくては、その霧雨すら落ちてきているのか、さだかには見きわめかねるような様相になっていた。

左側の商店や飲食店の街並みは、その停留所のある地点で絶える。

そこには「首都高速湾岸線」という矢印のついた交通標識があって、清澄通りとは直角

をなしているバス道路が矢印の方角へ折れ込んで行っているが、標識の先からはじまる清澄通りに面した東京商船大学の緑の濃い木立がいったん切れたところにある歩道橋のあたりも「フェリー埠頭　豊洲」への曲り角になっていて、そちらへもバスが通じているからかなり広い道路である。そこを越えてさらに行くと、雨を吸って読み取りにくくなっている大学の大きな木の門札をさげた正門と校舎が見えてくるが、幾棟かの職員官舎らしい家屋を最後に大学の敷地が尽きると、それまで平坦だった道路は次第にゆるい登り勾配になって、ほぼ登りきったへんには、濃紺の地に白ぬきの文字で「隅田川　川をきれいに美しく　東京都」と三段に横書きした、かなり大きな横長のプレートが立てられている。

そのあたりからが、現状に関するかぎり、まだ橋そのものにはなっていなくてもすでに相生橋の領域で、立ち停っては街並みを見たり、心覚えのメモなどをした私の歩行では時間を計測しかねるが、地下鉄の門前仲町からでは、ゆっくり歩いてもおよそ十分弱という距離である。

私が歩いて行った右側の歩道ぞいには、いくつかの会社の事務所が雑居しているらしい建造物や、十四階建の公団住宅などが建ちならんでいたが、一方は大学という片側町であるためにこちら側にも商店や飲食店はほとんどないので、自動車の交通は終夜絶えないか

もしれないが、日没後の歩行者の往来は稀だろう。その道路はもともと月島八丁目と柳島の先にあたる福神橋とのあいだを二十三系統の都電が走っていた路面であったから、幅員も私の家の近くにある早稲田通りの倍くらいはあるので、飲食店や物品販売の営業には適していないようである。

しかも週休二日制がようやく定着しつつある現在では土曜日も休日同然になっているので、土曜日のその日は天候のせいもあったのだろうが、白昼だというのに交通量が至ってすくなかった。直線のためにかなり遠くまで見通せる歩道にも通行人の姿はきわめてわずかで、淋しいという形容も、その日のその通りに関するかぎり誇張ではないと思われるほどであった。

相生橋そのものの欄干は、他の橋のそれとかくべつ異なるところがあるとも思われぬ、青いペンキを塗った平凡な鉄の柵に過ぎない。

が、「隅田川」と標示した濃紺のプレートがある地点と、青いペンキ塗の欄干との中間には、それもやはり勾欄というのだろうか、四角く切りそろえられた、かなり大きい同形同大のベージュ色の石が、三十メートルほども規則正しくつづいて一線上に置きならべられていると言っては正確さを欠く。十五メートルばかり続いたところでそれはいったん切

れて、五メートル見当の間隔をおいてからさらに十メートルほどつづいている。そして、歩道からいえば川水に近いほうの外側にあたる石の列の高さは一メートル強あるが、いかなる理由によるのか、その外側の勾欄と接着して置きならべてある内側の石の列の高さは約七十センチという二重ないし二段構造になっているばかりではない。五メートル見当の間隔をもつ先方の二重勾欄でいえばいちばん手前の、近くにあるほうの二重勾欄でいえば最も遠方にあたる位置の低いほうの石組みの列の上には、それぞれ直径六十五センチはあろうかと思われる、地球儀の地球を想起させるような球形の大きな石が載せられてあるという感じで据えつけられている。それを、そちらへ近づいて行った私は、ドキリとするような思いで視野にとらえた。

「やっぱり、そうだった。あの絵の橋にも、こういうボールのようなものが描きこまれていた」

と私は思った。同行者がいたら、かならずそれを口に出していたに相違ない。そして、口に出さなかったぶんだけ、私がそのとき受けた感情の波立ちは自身の内側へ内向したようである。

他の橋の場合にも絶無ではないかもしれないが、めったに見かけることがないものだけ

に、それが確認できれば相生橋だと断定できるきめ手になると、私は館林でその絵の、厳密にいえばその部分を眼にしたときから思ってはいたものの、なにぶんその絵が描かれてからではゆうに四十年以上――いささかの誇張をすれば半世紀ちかい時が経過している。そのうえ東京のほとんどすべてのものを灰燼に帰してしまった戦争と、人間よりも自動車のほうを優先する誤まった近代都市化に狂奔した戦後という二つの時期がはさまっているだけに、橋が改修されていれば、その美的目的による装飾性以外の、すくなくとも機能性からいえばまったく無価値とみなされても致し方のない球形の石塊など廃棄されていないという保証はない。それが取り払われてしまっているとすれば、さしあたって確認が得られなくなるとは言わぬまでも、なにがしか証明の手段が遠のくと考えながら家を出てきていただけに、目印の石が今なおそこに存置されていて、あまりにも造作なく疑問が解決されてしまったのにはむしろ拍子ぬけがして、すうっと血の気がひいていくように、ある種の脱力感にみまわれたことは否めなかった。

「あの画家は今から四十六年も以前に、いまこの自分が立っているのとおなじこの場所であの絵の最終部分を描き終ったわけだが、ああ終った、これですべてが終ったと思いながら毛筆を亡父遺愛の矢立へ収めたとき、彼はいまの自分などとはとうてい比較にならぬ激

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com